

HPVワクチン接種後の副反応等についての 海外の状況（追加編）

平成26年7月4日

厚生労働省健康局結核感染症課

HPVワクチンの副反応についての豪州の評価

豪州政府の予防接種後副反応についての報告書※では下記の通り記載されている。

- ・ HPVワクチン接種後の副反応報告には、けいれん、失神、疼痛、頭痛、悪心、めまい、疲労感等の非特異的な症状も認められた。
- ・ 過去には、中学生を対象とした髄膜炎菌ワクチンのキャッチアップ接種においても、同様の症状が報告されている。
- ・ これらの症状は、転換性の反応 (conversion reaction) だと考えられるが、特定のワクチンというよりもワクチン接種というできごとそのものに関連していることが知られている。

※ The Department of Health; Annual report: Surveillance of adverse events following immunisation in Australia, 2007.

- HPVワクチンは接種時の疼痛が強いことが知られている。その結果、疼痛に関する訴えが頻繁に見られており、場合によっては、その他の非特異的訴えを引き起こす可能性もある。
- 有効性と安全性の比較考量では、有効性が優ると断言する。
- 生物学的実証や疫学的実証が無く信頼性に乏しい意見や報告に基づき、HPVワクチンの危険性が主張されていることを憂慮している。
- 不十分なエビデンスに基づくワクチンの危険性に関する主張は、安全で効果的なワクチンの使用を中止することに繋がるなど、真に有害なものとなり得る。
- アルミニウム含有ワクチンが有害であるということや、局所のMMFとして認められる接種部位のアルミニウムの存在が自己免疫性疾患と関係しているということ、HPV DNA断片が炎症、脳血管炎又はその他の免疫反応を引き起こしているということについて、科学的エビデンスは存在しない。

器質的疾患として説明できない症状 (Medically Unexplained Symptoms)

- 相当数の「器質的疾患として説明できない症状」の患者が医療機関（特に専門外来）を受診しているとの報告がある。
- 英国の神経専門外来の初診患者（3781例）を調べたところ、30%の患者（1144例）の症状は、「医学的に説明できない」とされた。1年6か月間追跡したところ、そのうち4例（0.4%）のみが器質疾患による症状と明らかになった（うち2例は、初診時に指示した検査によって明らかになったもの）。

診断	患者数（全数 1144）
神経疾患があるが、症状がその疾患では説明できない	293(26%)
頭痛	292(26%)
転換性障害（非てんかん性けいれん、知覚障害、運動障害）	209(18%)
その他（痛み、めまい、疲労など）	305(31%)

小児期・思春期における転換性障害の罹患率（豪州） ※

- 2002～2003年の2年間に転換性障害と診断された16歳未満の患者を調査。194名が確認された。
- 罹患率2.3(10万人年あたり)
- 専門医の多いNew South Wales州では4.2
- 論文に示された年齢分布、男女比から、**10以上16歳未満女子の罹患率を推定**
→ **7.1 (10万人年あたり)**

転換性障害の症状	頻度（重複有）
運動症状	64%
感覚症状	24%
非てんかん性けいれん	23%
呼吸症状	14%
付随症状 痛み	56%
疲労	34%
その他	20%

※Kozłowska K, Nunn KP, Rose D, Morris A, Ouvrier RA, Varghese J. Conversion disorder in Australian pediatric practice. J Am Acad Child Adolesc Psychiatry. 2007;46(1):68-75.

転換性障害とは（「新臨床内科学」（医学書院 第8版）より）

- 四肢に力が入らないなどの運動障害や、しびれや知覚麻痺などの感覚障害、非てんかん性けいれん等の身体症状を訴えるが器質的所見に欠ける病態である。